

# 車いす安全整備士運営事務局(JASPEC) 誰にでもできる点検と整備

車いす安全整備士などの専門家ではなく、「日常お使い  
いただいている方」が点検することができる項目で、  
事故などを未然に防ぐことができる内容です。



## 1. フットサポート

### (1) フットサポート(貫通式)の仕組み



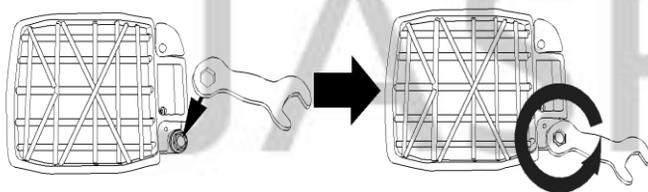
パイプに直接穴が空いており、そこに  
ボルトを通して固定しています。  
ボルトの締付が緩いと、プレート  
を上げて落ちてくるため、しっかりと  
増し締めしましょう。

※工具は車椅子ポケットに入っている場合が多いので、それを利用してください。

### (2) フットサポート(ウェッジ式)の調整



フットサポート裏側にある  
ボルトを緩めると、高さの  
調節が可能になります。  
調節後はしっかりと締め、  
固定しましょう。



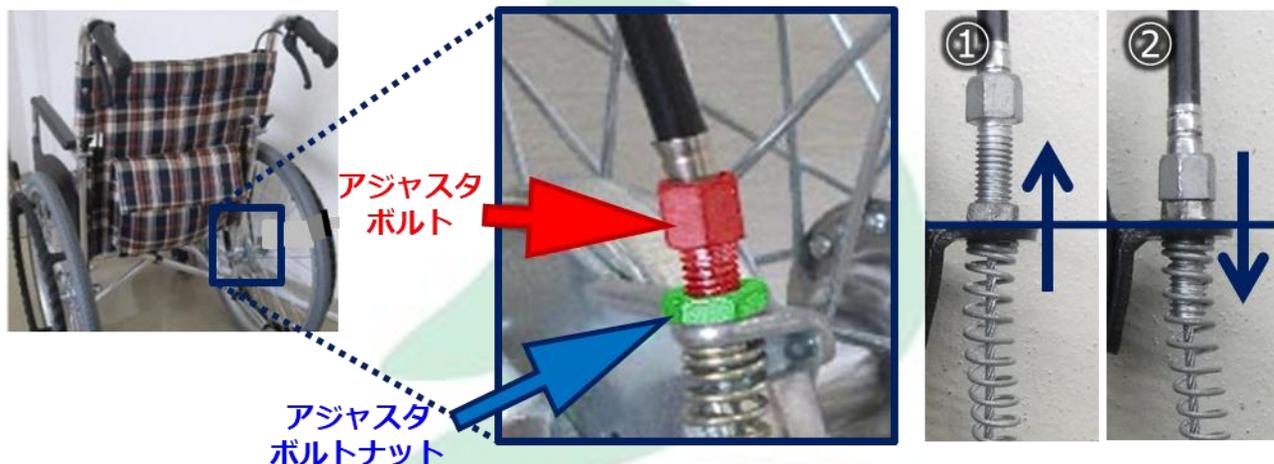
※屋外段差を考慮し、  
地面から最低5cmを確保  
してください。

※工具は車椅子ポケットに入っている場合が多いので、それを利用してください。

### (3) フットサポート調整後の確認

- ① プレートを上げた状態で、簡単に下りてこないこと
- ② プレートが抜けないこと(引き抜き)、乗り降り時で踵が当たった程度で動いてしまわないこと(プレート前後方向への旋回)

## 2. 制動用ブレーキ(介助用ブレーキ)の微調整 ～アジャスタボルトを使った微調整～



※ワイヤーの劣化で伸びることによって、効きが悪くなります。

#### ★効きを強める

ボルトを上げる(緩める方向)と効きが強くなります(写真①)。

#### ☆効きを弱める

ボルトを下げる(締める方向)と効きが弱くなります(写真②)。

※調整はナットを緩めてから行い、調整後は必ずナットを締めましょう。

調整後は、必ず効きの確認をしてください。

- ・効いていること
- ・レバーを握っていないなら、効いていない状態であること

※レバーの握った固さでは適切な判断はできません。

アジャスタボルトはあくまで微調整(ワイヤーが劣化したら交換必要)  
アジャスタボルトで調節できなくなったら、専門家へ連絡。

### 3. タイヤと駐車用ブレーキ(空気を入れる重要性)

空気が抜けていると、車椅子の操作が重くなります。

また、駐車用ブレーキが効かなくなってしまう、転落し、圧迫骨折などの大きな事故につながります。

タイヤ(チューブ)は、パンクしていなくても空気は抜けていきます。

ゴムが劣化すると、数日、数時間で空気が抜けてしまうようになります。

新品でも、最低1回/月は、必ず空気を補充しましょう。

短期間で空気が減るようになったら、必ず交換しましょう。

#### (1) 劣化見本

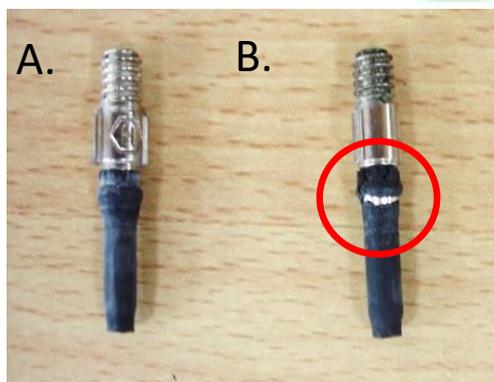


## (2) プランジャ(虫ゴム必要タイプ・虫ゴム不要タイプ)について

タイヤに空気が入らないor入れても短い時間で抜けてしまい、パンクを疑うとき、原因がプランジャである可能性があります。プランジャの交換さえすれば、問題解決する場合があります。



- ①リムナット(バルブナット)を緩める
- ②トップナットを緩めて、空気を抜く
- ③トップナットを外して、プランジャを取り出す



### ☆虫ゴム必要タイプ

- A. 正常状態
- B. 虫ゴム破損状態(交換が必要)



### ☆虫ゴム不要タイプ

- 左: スーパーバルブ
- 右: MPプランジャ

※見た目で劣化の判断はできない

### (3) タイヤの空気入れ

駐車用ブレーキは、タイヤにブレーキシューという金属を押し当てて、タイヤ空気圧の反発力で、タイヤの回転を止めています。

そのため、空気が抜けると、ブレーキが効かなくなり、事故が発生します。

駐車用ブレーキが効かなくなったら、何より先に、空気を補充しましょう。

- ① タイヤ側面に記載されている適正空気圧 (Okpa、OPSI等の圧力の単位)を確認して入れます。



$$350\text{kPa} = 3.5\text{kgf} = 50\text{PSI}$$

このように、**単位**が変わると数値を換算する必要があります。

- ② 適正空気圧を補充するためには、目盛り付きの空気入れが必要です。  
※高圧タイヤ用の購入をおすすめします。



虫ゴム仕様のプランジャの場合は、タイヤ側面の空気圧数値に130kPa追加した数値まで補充しないと適正空気圧まで入っていない状態になります。

※スーパーバルブは数値とおりに補充してください。



空気を入れる作業で、チューブを傷めてしまうことがあります。ダメージを与えない作業を知るために、JASPECサイトの「破壊促進メンテナンス手法」をご参照ください。